故郷(4)

魯迅
竹内好 訳

ある寒い日の午後、私は食後の茶でくつろいでいた。表に人の気配がしたので、振り向いてみた。思わずあっと声が出かかった。急いで立ち上がって迎えた。

来た客はルントウである。ひと目でルントウとわかったものの、そのルントウは、①私の記憶にあるルントウとは似もつかなかった。背丈は倍ほどになり、昔の艶のいい丸顔は、今では黄ばんだ色に変わり、しかも深いしわが畳まれていた。目も、彼の父親がそうであったように、周りが赤く腫れている。私は知っている。海辺で耕作する者は、一日中潮風に吹かれるせいで、よくこうなる。頭には古ぼけた毛織りの帽子、身には薄手の綿入れ一枚、全身ぶるぶる震えている。紙包みと長いきせるを手に提げている。その手も、私の記憶にある血色のいい、丸々した手ではなく、太い、節くれだった、しかもひび割れた、松の幹のような手である。

私は、感激で胸がいっぱいになり、しかしどう口をきいたものやら思案がつかぬままに、ひと言、

「ああルンちゃん——よく来たね……。」

続いて言いたいことが、後から後から、数珠つなぎになって出かかった。※チアオチー、跳ね魚、貝殻、チャー……。だが、それらは、何かでせき止められたように、頭の中を駆け巡るだけで、口からは出なかった。

彼は突っ立ったままだった。喜びと寂しさの色が顔に現れた。唇が動いたが、声にはならなかった。最後に、②うやうやしい態度に変わって、はっきりこう言った。

「旦那様！……。」

③私は身震いしたらしかった。悲しむべき厚い壁が、二人の間を隔ててしまったのを感じた。私は口がきけなかった。

※チアオチー〜…チアオチー、跳ね魚、貝殻、チャー、いずれも三十年前のルントウとの会話に登場する。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「私の記憶にあるルントウとは似もつかなかった」について、次の各選択肢を、「『私』の記憶にあるルントウ」と、「現在のルントウ」に分け、記号で答えなさい。

ア 顔は艶のいい丸顔である。
イ 顔には深いしわがある。
ウ 目の周りが赤く腫れている。
エ 手は血色がよく、丸々している。
オ 手は太く、節くれだち、ひび割れている。

「私」の記憶にあるルントウ〔　　〕
現在のルントウ〔　　〕

(2) ――線②「うやうやしい」の意味を選びなさい。

ア 親しみがあり、誠実なさま。
イ 遠慮がなく、ぶしつけなさま。
ウ 若くて、物事に慣れていないさま。
エ 相手を敬い、丁重にふるまうさま。

〔　　〕

(3) ――線③「私は身震いしたらしかった」とあるが、このときの「私」について正しく述べているものを選びなさい。

ア 身分や境遇の違いの中で自分とルントウが隔てられてしまったことに強い衝撃を受けている。
イ 思いがけないルントウの言い方によって、自分とルントウの立場の違いを思い出している。
ウ ルントウが自分の記憶にある姿と異なることに驚き、時間の流れを改めて感じている。

〔　　〕